

「折たく柴の記」考

宮 崎 道 生

序

- 一、書 名
- 二、執筆の動機と執筆年時
- 三、形態と資料
- 四、構成と内容
- 五、伝来と流布
- 余 論

序

折。た。く。柴。の。記。は、我國における自叙伝中の白眉として定評がある。白石その人の遺志によって、明治以後公刊を見るまでは新井家に秘匿されて来たため、極く一部の人を除いてはこれを披見する機会に恵まれなかった。而して、明治十四年の白石社刊本によって、ひろく一般人によまれる端緒が開けてからは、本書は一般には一種の隨筆として受取られて来たやうである。啓蒙的解説はもとよりとして、本書の学問的価値についても、従来すでに要点は解明されてきてゐるのであるが、なほ再検討を要する部面が残つてゐるやうに思はれるので、書名をはじめ、成立事情、形態、構成、内容、伝来等につき、紙幅の許す範囲内において卑見を申し述べることにする。

一、書名

本書は、折たく柴の記・折焚く柴の記・折焚柴之記・折焚く柴等々の書名題字を以て知られて来てゐるが、書名の由来については白石自身何等の明証をも残してゐないため、断定は憚られるけれども、既刊の註釈書や叢書辞典類の解説の多くが述べてゐるやうに、後鳥羽上皇の御製「思ひ出づる折りたく柴の夕煙、むせぶもうれし忘れがたみに」(新古今集卷八、哀傷歌)に拠つたと見るのが妥当であると思はれる。

これについては勝田勝年氏に異論があり、この書の由来はもっと卑近な所にあるとされてゐる。即ち氏は、後鳥羽上皇の御製を出典とするとの説を以て石上宣統の『卯花園漫録』に始まるものとされ、爾来その説がそのままに踏襲されて来てゐるが、疑問の点は、白石は詩才には長じてはゐたが歌道に関心がうすく、万葉集以外の歌集はほとんど研究してゐない、室鳩巢宛の書簡に越前九郎兵衛と白石の父との会談を記して、「夜すがら柴を焼てむかし今の事ども語る」とあるが、柴を焼いてむかし今の事ども語るとは回顧談に他ならぬから、彼が回顧談の形式をとつた著書に「折たく」柴の題名を付したのである、といはれる。⁽²⁾卯花園漫録は、文化六年孟夏下浣の序をもつもので、その文には^(4月)

「新井白石の折たく柴の記の名は、古歌に

おもひ出る折たく柴の夕煙　むせぶも嬉し忘れがたみに

と云歌をとりて、名づけ玉ひしとおもはる、また外に拠のありしにや」^(新燕石十種第三〇頁)
書刊行会本三五〇頁

とあつて、石上宣統その人の判断であることが知られる。ところが、この御製出典説は卯花園漫録以前すでに現はれてをり、また同時期に他にもこの説に従つたと思はれるものが出てゐる。即ち前者は、群書備考所載、金溪雜話(南川維遷著)への書入(湯浅元禎)であり、⁽³⁾後者は堤朝風の白石先生著述書目の註記である。群書備考は旗本の土村井

量令の著、文化丁亥の日付をもつものであるが、載せる所は金溪雜話への書入、実は湯淺常山の文であるから、記事内容は常山の歿年——天明元年以前のものであることいふまでもない。これには次のごとく見える。

「白石文昭廟の寵遇厚く、種々の書を著し献上候由、日々侍講の事等、具に新安手簡に見え申候、新安手簡と申候は、……外には絶てなく、田安公の文字黒沢左仲と申候人方に有_レ之候、禎が豚犬兒明善、東役の時より借得写申候種々の文御座候、此内に奥に相見え申候白石文折たく柴と申候書、二冊著述御座候由、後、鳥羽帝のおもひ出る折たく柴のゆふけぶりむせぶもうれしわすれがたみにと申候御製にて名をつけられ候由、……」(国書刊行会本三五六一七頁)

これによれば、常山がその子明善を通じ田安家の儒者黒沢左仲から本書の存在と書名の由来とをききえた事情が明かであるが、右につづく文の中に、明善が白石の孫とも交際があり、かつ折たく柴借用を申入れたことが見えるから(「右通之至て懇意に明善を伝次郎おぼしめされ候、然し折たく柴は出しがたき由にて候き」)、或ひは右の黒沢からの伝聞を伝次郎に確かめる所があったかも知れない。

次に朝風書の目は、文化六年の序をもつもの、その文には

折たく柴の記三卷 記文廟遺事及出身始末雜事
取古歌詞而名托意尤婉

とある。(新井白石全集第六七〇九頁) この文面では、単に古歌詞と見えるだけだから、これを御製出典説の一つとして数へることは出来ぬといはれるかも知れないが、古歌詞に取りて名づく、といひ——その古歌詞に該当するものとしては後鳥羽

上皇の御製が最もふさはしいものである——、意を托する尤も婉なり、といふ表現を用ひてゐるところから、私はかく判断する。ただ、この書目の体裁が漢文体であり且つ簡潔を旨としてゐるため、御製を原形通り引きえなかつたものと思はれる。朝風は熱心な白石研究者の一人であり、従つて本書についても十分の知識をもちえてゐたものと推考

する。

かりに後者を除外するとしても、常山の文の方はその出所から推して信頼できるもののやうであるから、本書の内容と併せ考へて、御製出典説は肯定してよいやうに思ふ。本書の内容性格については後節で検討するつもりであるが、序文及び上掲朝風の註記によつても判る通り、六代將軍の政治的業績を顕彰することに一半の目的があつたのであるから、單なる回顧談のものではない。本書が他面、家訓としての性質をもつものであることは、勝田氏も十分に認められるところであるが、かういふ家訓的の著述をものするに至つたそもその機縁が、家宣と白石との出会にあるのであるから、白石をして一躍旗本の列に加はらしめたほどの家宣の恩寵を、子孫に銘肝させることが本書に課せられた第一の使命であつたこと、序文に徴して明瞭である。而して、本書執筆の時点を考へると、末尾の文によつて察せられる通り、五代綱吉および新將軍吉宗の側近者支持者らによつて、六七代の政治が批判され非難されてゐた状況であつたので、その点、前掲御製の含著する所と相通ふものがあり、朝風のいはゆる「托意尤婉」の解釈が生れ得るのである。だから、單に回顧談の形式をとつたといふ意味で「折たく柴」の題名がつけられたとするのは、名実相伴はない感を抱かしめる解釈で、賛同しがたいところである。それならば、何故白石は本書々名の由来について自ら書き残すことをしなかつたのであらうか。晩年白石は、佐久間洞巖に対し相当明けた手紙を書いてゐることであるから、これについても何らか説明するところであつてよいと思ふのであるが、沈黙を守つてゐるのは何故であらうか。これについて私は、本書に関する限り白石がかく極めて慎重な態度をとつてゐるのは、その内容が政局の裏面、政局担当者をはじめ多くの人物の挙措を取扱つて頗る機微にふれるものであること、従つてそれが何らかの機会に幕府関係者、とくに反白石派の人々に知られ目にふれて、白石自らもしくは子孫が奇禍にかかることとなり、ひいては累を先君家宣に及ぼす結果となることを恐れたのではないか、と推測する。洞巖宛手簡の一つにおいて白石が、

「然らば某終りをよくし候はぬ事、天薨（註、深見新右衛門）二男のやうの事の奇禍も候はんには、文牘の御目、がねをもうしなひ、日本の耻辱を万里の外に残し候はむは不忠の大なるもの、不孝不慈の罪は不_レ及_レ申候」全集五、四一八七—一八八頁と語ったことなど、これを思はしめるものである。さういふ深い考慮から、口伝として子息明卿・宜卿等少数者に書名の由来を語るにとどめたのではあるまいか。既述の黒沢左仲などがこの説を知つてゐたのも、おそらく口伝へによるものであらう。

勝田氏のもう一つの論拠——白石が歌道に関心うすく万葉集以外の歌集は殆んど研究してゐない、といはれる点は大體その通りと思ふが（白石自身、小瀬復庵宛の書簡において、「老拙倭歌の事心得候はぬは不_レ及_レ申上」云々と述べてゐる全集五、一六〇頁）、今問題とする後鳥羽上皇の御製については、白石が上皇に特別の関心を抱いてゐたことが知られることから、全くこれを知らなかったと断定するのは早計であるやうに思はれる。(4)

二、執筆の動機と執筆年時

前節少しくふれたやうに、本書は、六代將軍家宣の治績を顕彰すると共に、白石自らをも含めて祖先の事蹟を子孫に知らしめんがために執筆されたものと考へられる。それは先づ序文に、

「よのつねの事共は、さてもやあるべき、おやおうちの御事、詳ならざりし事こそくやしけれど、今はとふべき人とてもなし。此事のくやしさに、我子共もまた我ごとくの事ありなん事をしりぬ。今は、いとまある身となりぬ。

心に思ひ出るおり／＼、すぎし事共そこはかとなくしるしをきぬ。……それが中、前代の御事におよびし事共はいともかしこけれど、世によくしれる人もなきは、をのづから伝ふる人のなからむもわびしからまじ。(ママ)我子むまごの後までも、これらの事ども見むものは、おやおうちの身を起せし事もやすからず、おやにてありしものゝ、前代の御

めぐみをうけし事はよのつねならざりし事をも、おもひしる事もありなむには、忠と孝との道にもたがはざる事もありなまじ。^(ママ)」(新井家襲蔵の自筆本に拠る、以下の本文も同様)

とあるによって明瞭であるが、またこの中の「前代の御事」云々に対応するものとして、末尾の記事中に左の如き一節があつて、執筆の意図の所在が明かに看取せられる。

「彼朝臣(註―側用人間部詮房)の事にあはせて、前代の御事をもかたづけ申さるゝ事のごときは、百年にして公議定まらむ日、天下の人の議しなむところこそ、恥しき事なれ。」

前者の序文に附せられた日付が正徳六(享保元)年十月四日である――「丙申の十月四日に筆を起しつ」―――に對して、後者の一節をふくむ割註の記載の後、即ち卷末の日付は正徳六年五月下旬――「正徳六年丙申五月下澣筆を絶つ」―――となつてゐる。この起筆と絶筆との日付上の矛盾は一見奇異に思はれるが、共にそれぞれ意味のあるものである。十月四日は家宣の命日で、前者の日付は家宣の四回忌に本書の筆が起されたことを示してをり、五月下澣絶筆の方は、將軍家継の死去とそれにつづく白石等家宣側近者の罷免、すなはち六代の延長としての家継の治世の終焉を劃期としたことを示すもの、と解せられる。この絶筆は、おそらく春秋の態度――孔子が春秋を哀公の治世における獲麟の記事(「十有四年春、西狩獲麟」)で終つたのに倣つたものと思はれる。十月四日、家宣の命日といへば、白石は家宣の逝去と同時に致仕を決意したほどで、しばらくの後實際に致仕を願ひ出たのであり(尤もこれは許されなかつた)、白石にとってはこの命日は忘れがたく、従つて起筆には恰好の日時と見られるものである。但し、實際の起稿が果してこの日付の通りであつたかどうかは審らかでない。

上記の通り、白石は家宣の死に殉ずる氣持であつたのが、自らの獻策にかかる金銀改良その他の重要政策が実現されないままであつた事情もあり、同志の間部詮房や老中らの留任要請に動かされて、家継の代にも本丸寄合衆の一人

として請はれるままに、消極的ながら種々建議をつづけてゐるうちに家継の早逝にあひ、心外にも罷免の憂目を見るに至つたわけで、従つて筆が七代までに及ぶとはいふものの、家宣の代を記した中巻と、家継の代にあたる下巻とでは自から筆致の相違がある。ともかく、家継の死去、七代將軍の治世の終焉を機縁として本書の執筆が企てられたので、執筆の動機は、先づ亡き將軍家宣の政治的業績——白石自らが大いに貢献するところのあった——の顕揚にありあはせて子孫教誨のための父祖の事蹟の彰明にあつたこと疑を容れないところであらう。而して前引、序文末尾の「我子むまごの後までも……忠と孝との道にもたがはざることもありなまじ」といふ言表^(ママ)によつて知られるやうに、公人白石と私人白石との二つの意識は完全に融合して一つになつてゐるのであるから、右の二つの動機は二にして一にして二といふ不可分の關係にあると見る事が出来るであらう。

次に執筆の時期であるが、起筆は右に見た通り正徳六〇享保元年十月四日以後のことと一応認めるとして（四日と確定はできない）、その分量から考へても完稿までには少なからず時間がかつたものであることは疑ひないところだ、例へば次のごとき、明かに享保二年の執筆にかかるとを示す記事がある。それは享保元年三月廿二日の興利建白、請願禁止の記事で、その一節「詮房朝臣老中の人々と議して、其の制条を下されたり」の割註に、「去年の事也」と見えてゐる。また、下巻における勾引人の事件（紀州牟婁郡船津村出身姉妹の人身売買）の記述中、これは「今より六年の前、正徳元年辛卯の冬」と見える一節からも同様の推測がなされ得る。その他、此年といふ時点の示し方の曖昧な記事が随所に見られるが、特に下巻には「これもその頃の事也けり」、「これも此年の冬の事也」、「これも此ほどの事也」等、日付を欠き、しかも附記的記述の部分が少なからず見えてゐて、享保二年以後の加筆を思はせるものがある。なほ、干支や年月日時の記事にも明かに誤謬と認められるものが幾つかあるが、その中には、かりに正徳六〇享保元年を基準とした場合、それより余り遠くない時期についてもさういふ誤謬が見られることから推すに、本⁽⁶⁾

書の記事の或る部分はかなり晩年の補筆加筆によるものがあるとすべきであらう。この態度は、白石の他の著書においても（例へば、西洋紀聞のごとき）往々見られるところである。写本類については後述するが、この自筆本とくらべる時、他の写本に僅かながら記事の缺脱があることなども、完成以前における或時期の稿本の伝写を示すものではなからうか。ともかく、本書の執筆は、致仕後間もない頃のことであるは勿論として、完成までには相当の時日を要したものと認むべきであらう。

三、形態と資料

本書が国文で書かれてゐることといふまでもないが、国語国文学者の意見によれば、その文体は一家の風をなしてはゐるものの、新古雅俗相混して必ずしも上々とはいひがたいとの事である。例へば、林麴臣氏は、序文に「外ざまの人の見るべきものにもあらねば、ことばのつたなきをも、事のわづらはしきをも、えらぶべしやは」とあるのを引いて、「素より句勢文飾に意無く、偏に子孫の為に親、祖先の在りし事の実蹟を家に遺し伝へんとて唯だその目のあたり、見るが如く真を書くを旨とし、事実にはざるを主として、筆の勢に打ち任せたりしものなり。」といひ、「故に稚き筆づかひ、はた語格文法の誤謬、すくなしとせざれど、天真爛漫の筆意、頗る非凡奇絶、作文の模範として価値あり。文勢、雅俗の二体を折衷し、一家の風をなせる者の如し。」（『折たく柴の記講義』）といはれ、また内海弘蔵氏も、文体について「この書の文章は、全篇を通じて、擬古文調の雅文であるが、その後半は前半とやゝ体を異にして、むしろ時文調のものである」といひ、とくに擬古文調については、「既に一般に文学史家の指摘があるやうに、その古語の用ゐさまも正確でなく、その古文脈をまねた所もところどころおぼつかない所があるといふ瑾を残してゐる」と評し、而してその筆致については、「さすがに一代の巨匠の筆になったもので、そこにはまたおのづか

らその氣品の凡ならざるものを、しのばせるに足りるともいふべき筆致が見られるのである」といはれ、さらにまた単に文章そのものの上からいへば、さうすぐれた文章とはいひ得なからうが、内容と併せいへば巨人白石の面影をしのぶに足るものがあり、簡潔遒勁な筆致をもつ藩翰譜に比すれば、この書の文章は優雅ではあるが、やゝ冗漫の弊に陥つてゐる憾をとめてゐるといはなければならぬ、とも評價されてゐる。(新釈日本文学叢書所収『近代名家文集』中、折たく柴の記、の解説)

白石が東雅の総論において、言語に新古雅俗の別のあることを述べてゐることは著名であるが、右の批評にもある通り、本書が擬古文体と時文体を併用し、用語も雅俗打ませて自己の思想感情を自在に表明したことは、当時としては注目すべき態度であつたとはなるまい。そのスタイルの如何はしばらく措いて、白石が何故国文体を以て本書を執筆したかを臆測すると、その理由は二つあると思ふ。その一つは子孫の読解に便ならしめることであり、もう一つは国語国文の發達に資しようといふ意図があつたらしいことである。本書中、宝永武家諸法度及び同句解の起草を述べた条において、当時における文学の衰微を指摘し、該法度が漢文体で書けなかつたこと、またこれを周知させるために句解を必要とした事情を明らかにしてゐるが、かういふ経験と判断とが、自らの子孫を讀者として想定した場合に平易を旨とする文体をとらしめ、併せてやさしい措辞、振仮名、返点等を用ゐる施すに至らしめたものと思ふのである。(7)理由の第二―国語国文の發達に資しようとの考は、東雅中の次の一節などから窺知せられる。

「我國の古言。其義隠れ失せし事。漢字行はれて古文廃せしに因れる多しとこそ見えたれ。細かにこれを論じなむには。此語と彼字と主客の分なき事あたはず。我國の言。太古の初よりいひ嗣し如きは即主也。海外の言の如きは即客也。漢字盛に行はれしに至ては。其義を併せてかれに随はずといふものあらず。これよりして後。客つるに主となりて。主はまた客となりたりけり。」(総論)

ここに示された国語の主体性回復の必要感は、歴史学者としての白石が古史研究に際して身近かに抱いたところでも

あったので、それは「四道將軍」の將軍といふ言葉について

「是後世將軍の始也と申す歟。しかれども其代に將軍などいふ名号有しにはあらず。日本書紀に、しるされし所は、後代史作られし時、潤飾の詞と見えたり。」○割註
左記

崇神の時、今の文字我國にいまだ伝らず。古事記に、みえし所も將軍などいふ事は見えず。」(読史余論卷二、岩波文庫本、一〇九頁)

といったることからも、それが推察される。白石が書紀よりも古事記を重んずる口吻をもちしたのは(小瀬復庵に語った言葉——名山藏手簡附録全集五、二六七頁)、書紀が体裁を整へるために、内容及び表現上に作為や潤飾を施してゐる点にあったのである。我國の古史古事の叙述にあたつてはもとより、自らの思想感情の表明に際しても、無理がなく正確を期するとなればやはり国文を以てするのが最も適切であることといふまでもないところで、かういふ科学者白石の見識と抱負とが、前記もう一つの条件と組合はされることによって、意識的に国文体をとらしめるに至つたものではあるまいか。勿論白石の著作中、重要性をもつものに漢文体を以てしたもののが少なからずあるが(例へば、將軍に献する意図の下に書かれたもの——国書復号紀事、采覧異言等のごときに、それがある、これは当時公式の文書は漢文体を以てするのが慣例であつたことによる、但し建議類は老中らの閲読を予想してゐたから国文で書かれた)、それにもまして国文体をとつたものが多いことは注目さるべきであらう。古史通・読史余論・藩翰譜等の史書をはじめ、西洋紀聞・同文通考・本朝軍器考等々諸方面の著述が国文が書かれてゐること、周知の通りである。

次に本書執筆に當つて用ひられた資料であるが、その大部分は建議類の草稿で、他に覚書・日記等が併せ使用されたと考へられる。第一の議草については、子孫の注意を喚起するために、それが現存することを註記したものとして例へば、白石の存在を天下に知らしめる機縁となつた朝鮮使節の応待(正徳元年)について、「すべて朝鮮聘使の時、の事は別に録せし物どもあれば、こゝに詳にせず、……其事の概要をば、又こゝにしるす也。」と述べてゐる如き、

また白石の事業の一代表と見なされる長崎貿易制限に関する建議（正徳二年）について、「それよりして奉りし前後の議草は、別に冊子となせし物共多ければ、其詳なる所はこゝにしるさず、其大要は……」と述べてゐるときがそれである。上記のものを除く議草類、および白石の関与した事件の記録類の現存を註記したものを拾つて年時順に掲げると、左のごとくになる。

○家宣時代

宝永七年……南都兩門跡の争訟事件、朝儀等調査のための上京

正徳元年……越後国村上領百姓等の訴訟事件、防火策十五条の建議

同 二年……宿駅人馬に関する建議、大名義絶事件

○家継時代

正徳四年……三寶院門主の訴訟事件

同 六（享保元）年……獄舎延焼による罪人の逃亡事件、勾引人の事件

かやうに草稿記録類の存在は註記しないが、明らかにそれらに基いて書いたと思はれるものには、次のごときがある。

○家宣時代

宝永六年……皇子皇女御出家廃止の献策

正徳二年……諸大名の課役献物軽減の建議・交通制度の改善（海道の問題）・〔イ〕萩原重秀の罷免（白石の彈劾による）・〔ロ〕婿殺し疑獄事件・一条院緋衣勅許問題・破船盜難事件

○家継時代

正徳二年……〔ハ〕幼主服喪に関する建議・〔ニ〕林信篤の改元論反駁

同 三年……〔ホ〕改貨に関する建議

同 四年……西宮神主の告訴事件・〔ヘ〕改貨後議の提出・長崎貿易制限の実施

同 六年……東大寺の勸進問題・海舶互市新令実施上の障害発生と除去・越後国盗賊の誤認事件
（享保元）

註 〔イ〕については白石の上書案が伝はってゐるが、未公開のままで現在のところ見ることをえず、ただ故栗田元次教授著『新

井白石の文治政治』によって大体を知り得るにすぎない。〔ロ〕〔ニ〕〔ホ〕〔ヘ〕は、それぞれ白石全集中に、決獄考、正徳年号
 弁・白石建議第四第五第八・白石建議第七として改められてをり（いづれも第六卷）、〔ハ〕は東大図書館に写本『国喪自言』
 が現存する（〔ハ〕については、古川哲史氏著『新井白石』、一〇一―一五頁、参看）。

かういふ議草類や覚書の記録のほかに、見のがすべからざるものとして日記がある。今日明かにざれてゐるところ
 では、白石日記は悉くが白石の手に成るものではないと認められるが（代筆の部分がある）、この日記に朱墨を以て
 つけられてゐる種々の符号の大部分は本書の執筆に当り、その材料摘出のために附せられたもののやうである。⁽⁹⁾なほ
 上巻中、白石の父祖についての記述の資料について、何らか覚書のものがあったのではないかを思はせる徴証の一
 つは、本書中に父の友人で浪人の越前某の窮状を記した部分と、室鳩巢宛書簡に見える越前九郎兵衛についての記事
 （全集五、四）とが全く同一の内容をもつてゐることである。多くの聴書をつくつてゐた白石のことであるから、父祖
 についても何らかのメモを作成してゐたのではあるまいか。⁽¹⁰⁾

四、構成と内容

本書の構成は、上中下の三巻となつてをり、前節すでにふれたやうに、上巻は白石の祖父・両親（主として父）お

よび甲府家出仕時代までの白石自身の事蹟をしるすのに対し、中下の二巻は六代將軍の政治的業績ならびに其の延長としての七代將軍治下の幕府關係事項の記述で占められてゐる。従つて既述の通り、資料として建議の草稿や覺書、記録が使用され、重要問題についてはその大要が述べられる、といふ方式がとられてゐる。而して三巻の中、とくに擬古文体の用ひられてゐるので上巻で、文章としては全巻中最も精彩があるものとされてきてゐる。

いま全三巻の中、主として、幕府政治への参与以後を記述した中下両巻につき、その内容を検討するとして、それに先立ち記述内容を項目に要約し排列して見ると、次のごとくなる。(この項目の立て方は小中村清矩博士に従つたものである。⁽¹⁾第三節、資料についての記述の部分における項目の称と多少表現に相違のある点をあらかじめ御承知ありたい。)

○中巻

- | | | | | |
|--|--|---|--|-----------------------|
| 1 奉 _二 封事 _一 之事 | 2 廢大錢被 _二 仰出 _一 之事 | 3 獻 _二 神祖法意解一冊 _一 之事 | 4 生類哀憐御停事 | 5 常憲君御葬送事 |
| 6 御石 _二 柳銘之事 | 7 皇子皇女議封事 | 8 国用議封事 | 9 大赦議封事 | 10 大御台所御他界之事 |
| 11 罪人赦除之事 | 12 万石已上人々皆叙爵事 | 13 御旗本息男被 _二 召出 _一 之事 | 14 明卿見参事 | 15 儀式之日召 _二 |
| 御側 _二 令 _レ 觀 _二 其儀 _一 給事 | 16 武庫戎器議封事 | 17 有章君御誕生事 | 18 世良田長榮寺藏新田系図事 | 19 御 |
| 台所叙 _二 從三位 _一 給事 | 20 賜 _二 新恩五百石地 _一 之事 | 21 芝口御門之事 | 22 奉 _二 聘事後議応接事議 _一 之事 | 23 新令頒 |
| 下并新令句解之事 | 24 荻原近江守御勘当事 | 25 祥瑞之弁事 | 26 奉 _二 俳優考 _一 之事 | 27 祖宗御実録之事 |
| 南都兩門主相論之事 | 29 八瀬里叡山結界之事 | 30 南都兩門争訟の議を奉る事 | 31 大成殿御詣次第を撰ぶ事 | 28 |
| 32 京都御使を被 _レ 命出立之事 | 33 御即位之儀を觀る事 | 34 天皇御元服之儀を觀る事 | 35 琉球使 _二 二伏見に逢事 | |
| 36 朝鮮使進見等之次第を奉る事 | 37 叙爵筑後守 _二 被 _レ 任事 | 38 川崎駅 _二 に至而信使を迎る事 | 39 加恩地を賜 | |

る事 40 朝鮮書御復弓之事 41 朝鮮使進見儀改定之事 42 避諱議之事 43 中門改造議之事 44 御書函并元子之事 45 草野之会水干を用る事 46 信使之事余条 47 越後国村上領百姓濫訴之事 48 火災議十五条を奉る事 49 御朱印頒下之事 50 阿蘭陀人に外国の状を問事 51 御門番之数を定め大名交替の役人を減る事 52 海道役夫駄馬の議を奉る事 53 所勞籠居之事 54 被_レ放_ニ舞妓_ニ事 55 移_ニ賜宅地_ニ之事 56 松平左門家之事 57 置_ニ御勘定吟味役_ニ事 58 評定所之事 59 萩原近江守被_レ奪_ニ職_ニ事 60 將軍家御所勞之事 61 長崎互市銅之事 62 一乘院宮緋衣勅許之事 63 文昭君薨去之事 64 金銀之事世人の議を問はしめ給ふ事 65 遠江国篠原浦漂流船之事

○下卷

66 七歳未満人父母乃為に喪服ある次第事 67 年号ニ正ノ字ヲ用ルハ不祥ノ例ニ非ル事 68 正徳中癡獄之事 69 有章君御代始之事 70 御実名之事 71 正二位大納言宣旨之事 72 御着袴始之事・御宝之事・賜書事 73 御元服事・將軍宣下事 74 宅地を増賜ふ事 75 文昭院御鐘銘并御院号之事 76 周閑御法会之事 77 大和川魚梁船之事 78 御旗本公務建議之事 79 改貨議之事 80 金銀製復古被_ニ仰出_ニ事 81 西宮神官の事に依り白川中将罪を得る事 82 三宝院門主院下卜訴訟之事 83 致仕事申出老中被_ニ止事 84 南明院殿御供米田御寄附之事 85 琉球使來事并書式之事 86 増上寺申状之事 87 改貨後議之事 88 長崎互市新例之事 89 落書之事 90 御役人奪_ニ職議_ニ之事 91 上様御不例之事 92 法皇_(八十の宮)姫宮入興被_ニ仰合_ニ事 93 近江国村方爭論後議之事 94 殺伯父罪案之事 95 焼亡之事 96 獄舎焼亡罪人逃亡之事 97 勾引人罪案之事 98 東大寺勸進院宣之事 99 互市新例已後商舶之事 100 主家逃亡之者強盜を斬る事 101 賄路を行ふ商人罪せらるゝ事 102 越後国盜賊召捕る事 103 武蔵国是政村乱妨人之事 104 有章君薨去之事

右のうち、將軍家及び白石自身關係の私的事項二一を除外し、残る八三項（但し、この中には同一事件を分割して項目を立てたものが幾つかある）を、かりに政治外交・財政經濟・文化（儀礼文飾）と大別して分類整理して見ると政治外交關係五二、財政經濟關係一一、文化關係二〇となる。これによって、白石の関与した六・七兩代の施政の輪廓がほぼ知られるわけであるが、全体の半ばを占める第一類の政治外交關係事項の記述において、白石がとくに強調してゐる点は、この兩代をつらぬくものが仁政の実現をめざす真摯な態度・努力であつたといふにある。それは表現措辭の上からも（「君子仁厚の政」の語が一再ならず用ひられてゐる）、また記述の詳密度からしても、疑を容れないところである。これについては、かつて詳論したことがあるから、再論をさけるが、庶民にかかはる司法事件に多くの紙幅をさき、記述に異常な熱意がこもつてゐることに於いて、家宣ならびに白石の政治理想と施政の態度とが明瞭に察知せられるのである。（第一類中司法關係のものは十八項に及ぶが——1911282947566265778193949697100102103——、その中庶民にかかはるものは、11294765779397102で、八件に上つてゐる。）

普通、白石が輔佐した六代家宣の政治は、礼文政治もしくは文治政治の稱を以てよばれ、且つ評價されてゐるが、武断政治に相對するものといふ意味で、また礼樂尊重の儒教思想にしたがつたといふ意味においては確かにさう性格づけることができようが、孔子の学は仁の一字に帰するといつてゐる通り（佐久間洞巖宛手簡^{全集第五}四五八頁）、白石および白石の政治教育をうけた家宣の究極の目標が、仁政の実現にあつたことを看過してはなるまいと思ふ。家宣は、その代始めに空前の大赦を行なつたが（幕府關係の者三九四九人、大名旗本關係五五九九人、計九五四八八人）、本書の記すところによれば、家宣自らが夜を徹して調査したものの数は二九〇一人の多数に及んだといふ。

次に、白石の父祖及び甲府家出仕時代までの白石の事蹟を記した上巻についていふと、それは序文に記されてゐる通り、祖父までの事蹟はおぼろ気ながら知りえるが、それも詳細は知りたい状態にあつた關係上、半ばは白石自身

に關する記述で占められてゐる。中下巻と同様の方法で立てられた項目（小中村博士による）を以てすれば、この上巻は五九項を含むことになるが、その中始めの十七項が祖父母と父母の事蹟であるに過ぎず、それも大部分は父に關するものである。但し、記述の分量からすれば、この白石以前の部分はほぼ半ばを占めてゐる。該上巻に關して一言しておくべきは、その冒頭に記された「新井といふは、もと上野国の源氏にて、染屋はもと相摸国の藤原氏なるに、いかなる故によりてか、常陸国には移り給ひぬらむ」といふ一節の信憑性である。周知の通り、家系については別に最晩年に書いた新井家系。一卷があり、この編著のために自ら文献の探究涉獵につとめると共に、水戸家の丸山雲平に調査を依頼したりなどして、史學者にふさはしい努力を重ねたのであるが、右の家系關係の記述だけは疑問の存するところであつて、直ちに白石の言に従ふわけには行かない。⁽¹⁵⁾

本書の内容に關して附言すべきは、当然採録すべき筈の重大事件であつて、記事といふ程の記事の見られないもののあることである。即ち、ローマ人シドナの取調については、ただ將軍の下命のあつただけを記し、「此事の詳なることは別に録せしものあれば、こゝにはしるさず」と述べ、またオランダ人との面談についても、「西南外国の事共問ふべき」將軍の命をうけて、二月廿五日より三月九日まで（正徳二年）旅館に行つて問對の事があつたと述べ「其事別に録せしものあれば、こゝにはしるさず」としてゐることがそれである。いふまでもなく、前者の別録は西洋紀聞としてまとめられ、後者は阿蘭陀考及び和蘭紀事といふ成書となつたのであるが、前者が自筆本をはじめ数々の写本を残してゐるのに反し、後者は不幸にして亡失し、僅かにその材料となつたと思はれる覚書の一部（「外国之事調書」所載）を伝へるにすぎない。⁽¹⁶⁾これら白石の生涯において特筆すべき、否わが国の近世思想文化史上、重大な意義をもつ事件の内容が省筆されてゐるのは問題となるとあらうが、これは此の両事件を白石が輕視したためではなく、主として本書執筆に際しての白石の最大関心が国内の政治問題にむけられてゐたことによるもので

あらう。しかし、これら国際的事件は、別箇の意味で重要性をもつものと判断されたからこそ、前記のごとき体系的著述にまとめ上げられたと推測されるので、その他内容的に要約しにくいことや禁制の—キシタンにふれたところのあること等の理由も手伝って、本書では記述が省略されることとなったのではあるまいか。

五、伝承と流布

第一節に引いた湯浅常山の文や、旧江沢蔵書本（現上野図書館蔵）等によっても知られるように、本書（白石の自筆本及び副本⁽¹⁸⁾）は嚴重に秘匿せられたから、白石歿後しばらくの間はごく一部の人の目にふれるにすぎなかったと考へられるが、その中にどういふ経路をたどってか——多分土肥元成の手写本が媒介となつて——次第に伝写されるに至つたらしく、管見の及ぶところ、主なものだけでも写本の数は十指にあまるほどである。私自身が披見しえたものは東大図書館所蔵の五本、上野図書館の三本、宮内庁書陵部の二本、神宮文庫の二本、内閣文庫本、京都府立図書館本、静嘉堂本等で、その他に栗田文庫本、鶯宿雜記所収本のあることを聞いてをり、これに知友の所蔵本をも加へれば、その数は二十をこえることとなる。このほか多数の写本の存在が想像されるとすれば、江戸後期にはかなり多数の識者の目にふれてゐたことが考へられるが、明治以後になると、十四年以後相ついで諸種の校定本ならびに註釈本が出版されたから、ひろく一般人によまれるやうになるわけである。⁽²⁰⁾ かやうに本書は、新井家に秘蔵されてきたものではあるが、その内容の故におのづから幕府関係の人々に知られることとなり、徳川実紀の編纂にあつて参考資料の一つに加へられるに至つてゐる。これは、本書の史学的価値を裏書する事実と認められやう。すでに述べた林甕臣氏や内海弘蔵氏、或ひはまた佐村八郎氏（『国書解題』）が推奨した通り、内容的にすぐれてゐるのみならず、文体も異色あるものであつたことから一般に迎へられるやうになつたものであらうが、例へば、森鷗外のごときも愛読者の一

人であつたのである。⁽²¹⁾

本書が国文で書かれた事情については、前節卑見を申し述べたが、用字用語について一言すべきは、前後の部分に相違があつて必ずしも統一されてゐないこと、また往々にして文法上の誤が認められることである。これは白石が既に老境にあり、しかも他に多くの仕事（著述）を抱へてゐたことに禍されたものであらうし、また白石の国語字自体に弱点があつたためであらう。ともかく、かりに内容をはなれて見ても、本書の平易と達意と簡潔（漢学的教養が然らしめた）とをかねた文章は、とくに明治の人々に親しまれる理由と考へられるものである。本書が文学的に見ても傑作と称せられるについては、白石が当時における、いな江戸時代全期を通じての第一級の詩人であつたといふ一面を想起する必要があると思ふ。行文の流暢遒勁、表現の凱切、情景描写の巧妙等々は、偶然にしてさうなつてゐるのではない。殊に上巻に示された彫塑的な筆致は、きはめて魅力的であつて、鵲外などが本書を重視したのも尤もと思はれることである。而して、この靈妙の筆づかひが多くの読者を獲得したことの結果として、白石その人及び白石をめぐる人々についての觀察や評價が重大な影響を蒙つたことも、注意されなくてはならない。即ち、白石やその父祖、また主君家宣及び間部詮房等の人々の人間像は、一段光輝あるものとなつてゐるのに対して、反白石派の人々は批判・指弾・筆誅を加へられることによつておのづから悪印象をあたへ、実質以下に評價される惧れなしとしないのである。この点は自叙伝共有の弱点で、ひとり本書にのみ限つたことでないが、一言申し添へておきたい。

余 論

以上五節にわたつて、折たく柴の記の成立・内容・伝承等を考察して来たが、終りに補足的に卑見の一端を申し述べて見ようと思ふ。

本書は、先行山鹿素行の配所殘筆や、後來松平定信の宇下人言と同様、全く非公開のものであった点で、ヨーロッパにおける自叙伝類——ルッソーの懺悔録・ゲーテの詩と真実・トルストイの告白等、公開もしくは多数人の披閱を予想して書いたものとは全く性質を異にするものである。前引の文で知られる通り、他見をゆるさぬ建前で書かれてゐることから、感情の抑制が十分でなく、随所に個人的感情があらわに出てゐるほか、臆測や伝聞による記述等も介在してゐることは、一読して直ちに気づくところである。知己としての將軍家宣および間部詮房についての記述は、過賛・過褒に近い嫌ひがあるのに対して、学敵林信篤や政敵荻原重秀等については酷評にすぎる傾きが見られるのは、その顕著な例であらう。既に述べたやうに、本書は、一方に家訓としての使命をもつと同時に、他方、六七兩代の政績の本質闡明といふ意図をも蔵するものであるから、白石自身は別とするも、白石の祖父および両親の記述に當つて多少美化を行なつたり、或はまた家宣および家継の代の政治の説明に潤飾が加へられるといふことは、当然あり得ることであらう。したがって、後者に関していへば、本書から受ける印象をそのままに六七兩代の政治的評價にうつすことは、危険としなくてはならぬ。しかも、六七兩代の政績の闡明は、必然的にその前の時期——五代綱吉の施政に対する鋭い批判につながることに、他方また自らの敵対者、即ち新將軍吉宗の側近者に対しても、弁護的態度を露骨に示すことになつてゐるから、これらの点もまた警戒を要するところであらう。従来、本書は、自叙伝であると共に当時における現代史としての性質を持ち、古史通・読史余論・藩翰譜と一連の關係にたつ史學的労作としても重んぜられて來てゐるが、敍上のやうな判断の下では、本書に対しては、古史通や藩翰譜と同程度の評價を加へるわけには行かなくなるのである。右に学敵・政敵に対する態度の厳しいことを挙げたが、しかしながら、例へば荻原重秀に対する記述において、一面には寛容と見るべき筆づかひもあること（重秀の死及び死後の部分）も見のがしてはならないであらう。また現代史として本書を見た場合、記事が体系的に排列されてゐず、繁簡よろしきをえないとい

ふ意味で、それは不完全なものといはざるをえないが——これは白石個人の歎替を通して語られてゐる以上やむをえないことである——、これを別箇の観点からする時は、却つてそこに白石の人間像が特徴的に現はれてゐると見られなくもない。

自叙伝が長所と短所とを併せもつことは、一般の常識である。周知の通り白石は、幕閣では鬼としておそれられ、知友の間でも自我の強さと自慢癖とによつて必ずしも喜ばれず、晩年は孤独の寂しさを味はざるを得なかったので、本書にも嫌味な箇所がないではないが、少年の日から苦難をなめつづけ、ゲーテのいはゆる涙を以てパンを食べた人だけに、その心情には深さと同時に暖か味とがあつて、読者の感動をさそふところが少くない。いま一々例証する余裕がないが、本書の底流をなすものこそは、心の奥深く湛えられた白石のヒューマニズムであると、私は判断する。本書が、古典中の古典として永遠にその生命を保ちつづけるであらう所以も、また蓋し主としてこの点にあると思はれる。

註

- (一) 内藤耻史氏著『校正標註折たく柴の記』、白石全集第三巻中の例言——今泉定介氏識、近代名家文集所収の内海弘蔵氏解説、『国史辞典(二)』(富山房刊)中「折たく柴の記」の項——中村孝也博士解説、等。
- (二) 歴史教育二の十一所載、「折たく柴の記考」
- (三) 湯浅常山に参考読史餘論の著書のあることはいふまでもないところであり、また文会雜誌には、少なからず白石及び白石の著述のことが記されてゐること等と併せ考へる時、この書人の文は常山の白石研究の状況をよく示すものとして注目される。金溪雜誌への書人の経緯や状況がどうであつたかは明かでないが、村井量令は旗本の士であるから、かういふ資料を手にする機会に恵まれたと思はれ、従つてこの記載は信用するに足るものといへやう。
- (四) 本文に引用した白石自身の告白によつて明らかな通り、白石は歌道には格別力を用ひなかつたやうであり、勝田氏もいは

れたやうに、万葉以外には研究らしいものが認められないが、万葉以外の和歌に対して全く無関心でなかったと思はれる証は、菅見の及ぶところだけでも幾つかある。例へば、白石紳書（巻九）には、定家の小倉山百人一首について書きとどめた詳細な一条があり（全集第五、七四四頁）、また書簡中にも、西行の歌に言及したものがあつた（小瀬復庵宛―全集第五、一六〇頁）。而して、後鳥羽上皇についての白石の論は、説史餘論において詳細に展開されてゐることいふまでもなく、また安積瀧泊宛手簡においても、承久の乱に關連して後鳥羽上皇に同情的な意見を述べてゐることであるから、その関心は決して浅くなかつたと見られ、従つて新古今集全体を通読したことはなくとも、上皇の御製を見ることはありえたと考へることは許されるのではあるまいか。但し、この点は後日の実証をまちたい。

(5) 池田雪雄氏著『新井白石』に拠る。なほ、拙著『新井白石の研究』五五一頁、註(一)を御参照ありたい。

(6) 本書中、時日の記載において誤謬のあることは、すでに三和礼子氏の指摘されたところであるが（「折たく柴の記」の誤謬―東京女子大学論集三の二）、それらの中、本書の執筆年時に近いものを拾つて見ると、(1)正徳元年十二月十一日の大火一廿二日（本書）、(2)同二年三月廿六日將軍家継の元服の儀一、廿二日、(3)同三年十月廿三日、金銀改鑄実施担当の役人選定一三日、等がある。（以上はいづれも徳川実紀の記載に基づく判定である。）

因みに、三和氏が（十三）条で、誤りであらうとされた琉球使の來朝十一月といふ記載は正確で、自筆本は十一月となつてゐるし、また日記にも十一月二十六日の条に参府の記事が見える。

(7) やさしい措辞といへば、なるべく漢字の使用を少なくして仮名を用ひてゐることにその心遣ひが見られるし、振仮名なども相当多くつけられてをり、普通読めさうなものにもこれを施したものが少なくない。例へば、

足下 胡顔子 燧 袋 番葉 散樂 從者 漁者 請給ふ所 事に堪ふる 公にめし出され 疎なれば 推薦給らむ

事（以上は巻上）、子孫万世の業を創給ふこと 老ども 新令を頒下さる 東萊府使 門外の幕次 乃貢 畏るべきの塗

大統の断給ひし事 不利の事ども 御後に候し 沿路の国々 貢米（以上は巻中） 引據 怠状 魚梁船 意多礼亜・

喝蘭地亞 断一例 代一物一替 我奉りし 人倫の変最大なるもの 調高ければ聴者稀也 世の譏取らむ事益なし 行脚

の僧 妄に其法を變ずる事（以上は巻下）

等がそれである。さらに返点を施したものに、例へば次のごときものがある。（速音符の用ひられてゐることに注意せられたい。前掲の語句の場合も同様。）

(4) 「君子動而世々為三天一下道一、行而世々為三天一下法一、言而世々為三天下則一。」

(四) 「孔子、父爲^レ子隱、子爲^レ父隱とのたまふは、(註略) 人倫の常一理のみ。
 (イ) 「吾発^レ之吾能収^レ之などいふ事もあれば」云々

(8) 栗田著書——本編第四の二、三四三—三五〇頁。萩原重秀弾劾の封事については、前掲拙著の附録(新井白石関係文獻)中に、「二六四 萩原重秀弾劾書案 壬辰九月十日 一通(清水八郎氏)」として掲げたが(七四八頁)、現在のところ本案の所在は審かでない。

(9) 大日本古記録本『新井白石日記』の解題(斎木一馬氏)に拠る。なほ、拙論「『新井白石日記』を読む」(新井白石序論所収)を参照せられたい。

(10) 白石がきはめて筆まめな人で、人の話を丹念にメモする習慣であつたことは、杉田玄白の形影夜話などにも収録されてゐるところであるが、父祖のことなど或時期に書きとめておいたであらうことは、本書序文中の概き(父祖の事蹟の不明)とも思ひ併せて、大いにあり得ることと推測する。

(11) 小中村清矩博士旧蔵の折たく柴の記は、現在東大図書館の所蔵に歸してゐる。これは上中下の三冊から成り、本文に掲げた項目は、朱筆を以て原文よりも大体一字分位高く記されている。原本の項目には返点が施されてゐない。便宜これを附した。また、途中で和漢混淆的表現が用ひられているが、これも原本通りとした。

はかに、かういふ項目を立てたものとして管見にふれたのは、京都府立図書館本であるが、これ程詳細ではない。また、新らしいものでは笠原節二氏の新註本(後註20参看)が同様の試みをしてゐて、項目の数は一九八に上る。

(12) 前掲拙著、本論第一編、第一章、宝永武家諸法度の起草。

(13) これについては、すでに拙著『新井白石』——三、政治家白石、の中、3 司法関係事件の処理、において詳述した、なほ、同書七、近代の啓蒙者の章(一七〇—一三頁の部分)をも参照せられたい。

(14) 上巻の項目五九は、左の通りである。

祖父母の事	父の事	父土屋家に仕る事	父行状の事	芦沢某の事	加藤某の事等・蛇太刀猿引二宝刀の事
父平生の事	高滝何某の事	越前何某の事	軍治正信事	土屋家祖先之事	神戸の家の事
父土屋家を去る事	母死去之事	古河少将に仕る事	父終焉之事	貨色の二字を慎むべき事	母并姉妹之事
三歳字を知る事	六歳詩を誦する事	学匠ハ利根氣根黄金の三こん有るへき事	日課の手習之事	太刀打の伎を習ふ事	志学之事
詩作始之事	始て木下順庵に謁する事	戸部の勘氣を蒙る事	土屋家を去る始末・仕官禁錮之		

事 富商の養子となるを辞する事 医業を勧むるを辞する事 富商の媒となるを辞す并醫論之事 堀田家を進退する事 明卿出生之事 市中に帷を下す事 加賀の仕途を人に譲る事 甲府に仕る初途之事 見參後初而進講之事 詩經進講之事 書經兼通鑑綱目進講之事 春秋進講之事 藩翰譜編述之事 文昭君御好學之事 和漢の書目を奉る事 賜書之事 賜金を以て鏝を作る事 木下先生歿する事 歲始開講儀之事 日講儀之事 御別恩之事 癸未歲大地震之事 文昭君儲嗣に立せ給ふ事 始めて西城に參る事 西城講筵を開く事 宅地黄金を賜ふ事 富士山焼灰降る事 当十錢を鑄る事 蕃類御憐の制出る事 常憲君薨去之事

(15) 白石が自家の出自を新田源氏に求めたことについては、私自身も意見を述べたことがあるが(『新井白石の研究』—第三章第三節新田氏の後裔としての白石の歴史意識、および『新井白石』一、白石の生きた時代)、これを精細に論じたものに勝田勝年氏の論考「『新井家系』の研究(滝川博士還暦記念論文集(白)、所収)がある。また、白石が安積澹泊を通じて丸山雲平(『諸家系図纂』の著者)に調査を依頼した事情は、新安手簡によつて明瞭である。(全集第五—二八・三〇四・三一・三二・三九・三三九頁等、参看。)なほ、白石の家系についての見解を支持する役割をもつた世良田長榮寺所蔵の新田系図のことは、本書折たく柴の記中巻に見えてゐる。

(16) 拙著、白石の研究、第二編世界圈認識、第一—第四章、参照。

(17) 湯沢常山の文は、次の通りである。

「此二冊は文廟へ申上られ候事共を詳に書きたる物ゆゑ、外へかたく出しがたき由、紀州様達て白石の孫伝次郎殿へ御所望被_レ成候得共、御断申上候て出し不_レ申候由うけたまはり候」

他方、旧江沢蔵書本の識語には左のごとく見える。

「此元書ハ故アリテ新井家ニ秘蔵之所 惜リ求メ書写ス (朱書) 前年十二月廿三日ヨリ始メ 時ニ天保三壬辰三月朔日 (署名)」

(18) 白石の研究、附録—「附考」白石の著書について(八〇二—三頁)、参看。

(19) 鶯宿雜記は旧桑名藩士駒井乗邸の編著で、写本五七六冊に上る大部のものであるが、この中に折たく柴の記も収められてゐるといふ。上野図書館に所蔵されてゐる由である。(広瀬敏氏編『増訂日本叢書索引』に拠る)

(20) 本書の刊行は明治十四年竹中邦香の校本を筆頭に、二十三年内藤耻叟の校正標註本、二十六年小中村清矩校閱本、二十七年鈴木弘恭校本、三十三年白石全集本(第三卷、今泉定介校)と相ついで行なはれ、その後佐藤仁之助氏の校註本(明治四四)、近代名家全集(新釈日本文学叢書第二輯第八卷)所収のもの(昭和三三)、笠原節二氏の新註本(昭和一一〇)、羽仁五

郎氏の校訂本（岩波文庫本、昭和一四）等が現はれたが、この他にも世界大思想全集―日本思想篇、大日本思想全集第六、近世社会学説大系第七、等にも収められ、広くよまれるに至つてゐる。因みに、本文前掲林麿臣氏の講義は上巻だけにとどまつてゐる。上記の中、最も信頼すべきは羽仁氏校訂本であるが、これは自筆本を底本としてゐるにも拘らず、相当に誤りがあり、連字符や振仮名等が大部分省略されてゐるのは惜しいことである。

(21) 拙稿「白石と鷗外」（日本歴史、一九三九・一四〇両号）、参照。

(22) 白石のビューマニズムを培つたのは、根本的には儒教的教養であらうが、それとあはせて、青年時代から逆境に生きぬいた生活体験も重視さるべきものと思ふ。白石紳書（巻一）に「人々此生を重んずべし、是父母の遺体也、全く歸へし、全く子孫に伝ふべし」（全集第五、六二四頁）といふ一句が見えるときは（孟子の語を引き、格雲の言葉として述べてゐる）前者のあらはれであらうし、後者については、晩年の心友佐久間洞巖にむかひ、「文昭院様へ被召出候はぬ時は、所々わたり奉公仕、間々には浪人仕、いかほど窮厄にもあひ候へども」と告白してゐる。文字通り、涙を以てパンを食べたといふことになるであらう。

〔附記〕

本論考は、昭和三十三年度科学研究費による研究の成果の一部を成すものである。